20200920レムナント教会1部

**人間らしい人間(Ⅱサムエル記11:22-27)**

　人生のフォーカスをどこに置くのかによって、その人の人生が左右されることになります。物事が自分の思うがままに進むこと、何かがうまくいくこと、そして、裕福になり生活が豊かになること、世において成功すること、それでなければ何もかもがうまくいかないのか、あるいは思い通りではなくてねじ曲がってしまうのか、金持ちではなくて貧乏なのか、成功よりは失敗してしまうのかということに、ほとんどの人は人生のフォーカスを合わせて生きていると思います。しかし、信者の私たちはそういったことに人生のフォーカスを置いていてはいけません。うまくいくのか、いかないのか、非常にデリケートになるでしょうけれども、うまくいっても、うまくいかなくても、金持ちになったとしても、あるいは貧乏であっても、その場、その状況で、イエス・キリストを誇りに思うのかどうかにフォーカスを合わせて行かないといけません。もしそうでなければ、うまくいってもそれが毒になってしまうし、また、うまくいかないことも毒になってしまいます。それが動物と違ってたましいを持つ霊的な存在である人間の在り方です。ですから、物事がうまくいくのか、他の人より豊かになるのか、あるいはそうではないのかなどに、今までは当たり前にフォーカスを合わせていたとしても、これからは信者としてどちらになったとしても、そこで自分は「イエス・キリストを誇ることにこだわる」というフォーカスを持っていただきたいと思います。これは単なる生き方のお話ではありません。これこそ霊的な戦いであり、目に見えない暗やみの勢力、サタンが踏み砕かれるか、あるいは目に見えないサタンに操られるかの分かれ道になるわけです。

　今日の聖書を見ますと、ダビデが今までうまくいって神に祝福されて勝利を治め、良い信仰の道を歩いていたダビデが、とんでもない犯罪を犯してしまう記録が紹介されています。人の妻を犯してしまう犯罪、また、それをもみ消すために殺人教唆のようなひどい犯罪を犯してしまうことが詳細に紹介されている場面です。これに対していろいろな見解が言えると思います。ダビデを中心にして今まで頑張って来たのに、なぜここまでダメになってしまうのか。あるいは、どんなに頑張っても一瞬、隙を許してしまうとこうなってしまうのかなど、ダビデを中心にしていろいろな解釈ができるかもしれません。特に気を付けないといけないことは、これを単なる倫理的な、社会法律に照らして考えてしまうということはクリスチャンとしては得するものではありません。もちろん社会の法律から見たときには、到底許せないひどい犯罪に間違いありません。しかし、サウル王は社会の法律に照らしてみると、ダビデのようなそこまでひどい罪を犯していないのに神に捨てられて、ダビデはそれ相当の報いは受けるようになりますが、全く次元が違う神の導きを受けるようになります。それで今日はこのダビデのとんでもない犯罪を見ている今を生きる私たちを中心にして、神様がどのようなメッセージを私たちに送っていらっしゃるのかということにフォーカスを合わせないといけないと思います。どのようなメッセージなのでしょうか。

　ダビデがああだ、こうだというよりは、これを通して神様は、この暗い世の中、日本の国を福音を持って生かすために召されている今を生きる教会、私たちクリスチャンに向かって、人は決して英雄になることはできませんとおっしゃっています。人は英雄になってもいけないし、英雄にしてもいけない、言葉を替えますと、人を誇ってはいけませんということがメッセージなのです。人は英雄になりヒーローになること、つまり、人の人であることを誇りに思うこと、これが世の中では最高の目標かもしれませんが、実はそれが人間が人間であることを忘れ、また、人間であることをあきらめることなのです。なぜかと言いますと、人間は独立的な神様ではありません。人は創造主の神様によって造られた被造物です。その中でも唯一、その創造主を知り、創造主に感謝して、創造主の神様を礼拝して、その創造主の祝福によって生きる、また、その神様と疎通ができ、神のみことばをいただいて、そのみことばに従って生きる唯一の存在です。犬や猫、猿のような動物には、そのような技能はありません。被造物の中で自分が神ではなくて、神によって造られた被造物だと分かって認識できる唯一の存在が人間です。それを神のかたちと言います。悪い表現で申し上げると、神のみことばに縛られて生きる者なのです。従って生きる者です。その神の力によって生きる存在です。そして、生きる目標は、その創造主の神の栄光を現すという目標をもってみことばに従って、神の祝福の中を味わいつつ生きる者です。その中に人間のまことの幸せがあります。つまり、自分を現すのではなくて、神のみことばに従って神の栄光を現す、その目標の中に人間の本当の幸せがあり、そこにまことの安らぎがあり、そして、人生のまことの勝利がある存在です。でも、今現在、世の中でそのような人間らしさというものは見ることができません。

　なぜかと言いますと、このように造られた神のかたちである人間が、神様に罪を犯してしまいました。その罪の一番の核心ポイントは、自分が被造物であることを否定することです。人間自身が自分の主人であり、だから、自分の思うがままに生きる。神のみことばに従ってではなく、自分勝手に思うがままに、自分が主人なのだ。これが罪です。それで罪を犯してしまいました。でも、それは悪魔のだましごとであって、人間は自分が自分の主人ではなくて、その裏で悪魔、サタンに支配され、悪魔が主人となりました。認めたくないでしょうけれども、ヨハネ8：44、「あなたがたの父である悪魔から出た者であって」とあります。神様は創造主であり、自分はその神のみことばに従って神の栄光を現す目的のために存在する被造物だということを否定すること、それが悪魔に支配されるということです。そのときから、つまり、人間自分が被造物であることを投げ捨てたそのときから不安が絶えません。神を失ってしまったので、自分が自分の人生の主人なので、当然、苦しみが絶えないし、人生さまようになるし、わざわいがやってきて、そのわざわいの人生からのがれることができません。それなのにサタンは、今も人間にささやき、人間を煽るわけです。「おい、人よ。おまえが神なのだよ。おまえがすべてなのだ。おまえが自分の人生の主人なのだよ。おまえがヒーローなのだよ。だから、自分を人間を誇りなさいよ。自分の思うがままに勝手に生きて、それでいいよ」と。特にサタンは人間を煽るために、世的なもの、世にある良いものをいっぱい与えます。ですから、特に人間が人間的にうまくいっているときに、人間的に優れたものを持っていたときにこそ気をつけないといけません。それをもって「すごいな。だからおまえは神なのだよ。もうちょっと頑張ってよ。神なんかいらないよ。おまえが自分の感じるまま、自分の思うがままに」。これが世の中の思想というものです。そして、それに全人類は称賛を送って、拍手を送っています。もしうまくいくことによって、あるいは世的なものが豊かに与えられ、優れたことによって、自分が神であり、自分が主人なのだ、自分の思うがままで大丈夫なのだ、ヒーローなのだと思って、神に背いてしまうことであれば、むしろ逆に取税人になった方がましだ。これが聖書のメッセージです。パリサイ人になるよりは、皆に後ろ指指される取税人、売国者になった方がましです。パリサイ人のように道徳的、法律的にしっかり守って、その結果、自分は大丈夫なのだ、自分はヒーローなのだと思うとすれば、逆に売春婦の方がましです。これは聖書のお話です。学校の教育、あるいは親が何も知らずに勧めているような言葉とは真逆の正反対のメッセージが聖書のメッセージです。自分を、人間を誇りに思い、その上、何もないかのように思うがまま、感じるままということは、どれほど愚かなことでしょうか。それは人間を放棄することです。人間は神の被造物です。それが幸せです。魚は水の中にいることが幸せです。水はいらないよと飛び出して、私は猿のようになると、それが勇気あるかのように。だから、魚の中から飛び出したのでヒーローになったつもりでしょうけれども、それは滅びの醍醐味なのです。勘違いの中にいてはいけません。問題はクリスチャンの私たちがその勘違いから刻印、根、体質になっていて中々そこから変わらないということでしょう。イエス様が山上垂訓の方でおっしゃった内容がそういう内容です。あなたがたは姦淫の罪を犯さずきれいな人生なので、それを誇りに思うのか。だから、キリストがいらないと言うつもりなのか。なら売春婦の方がいいのではないか。パリサイ人のように私はこうしました。ああしました。こう守りましたと言えるものがいっぱいあるのか。それで被造物であることを忘れたのか。取税人のように神殿のすみっこの方で名刺を持ち出すことはできません、言うことが何もありません、自慢できるもの、誇るものが何もないので、ただ一言、「神様、この罪人をあわれんでください」と言ったその人が義と認められました。これが聖書です。人は英雄になることはできません。なってもいけません。皆、罪によって、悪魔の誘いによって、人間を失いました。だから、生き方も人間らしい生き方を見ることができません。そこで神様は人を愛して、人間がまことの人間になるように、人間回復の道を備えられました。最初から創世記3：15、これは努力によって頑張るからどうにかなる問題ではないので、女の子孫が生まれて蛇の頭を踏み砕いて、そのときに女の子孫によって人間が回復できるようになると約束され、その約束がイエス・キリストの十字架と復活によって成し遂げられました。ヨハネ19：30、すべてを「完了した」と宣言されました。そのイエス・キリストがおっしゃいます。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」。このイエス・キリストを道として、人間回復の道として、「受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった」。この女の子孫として預言され、すべてを成就なさった、悪魔の頭を踏み砕いて勝利なさったイエス・キリストを救い主として心に受け入れるときに、失っていた神様とともにおられることになります。それをいのちと言います。やっと神様のことを父と呼ぶことができるし、創造主と被造物の関係を取り戻すだけではなくて、神様と親子関係になるその祝福がイエス・キリストを信じることになります。

　このときからガラテヤ2：20にあるように、私はもはやキリストともに十字架につけられました。今私が生きるのは、私の内側にいらっしゃる、私のために命を捨てられたイエス・キリストを信じる信仰によって生きる者です。つまり、キリスト・イエスを主人として迎えて、そのキリストをイエスによって生きる、これが人間らしい人生というものです。ダビデのとんでもない犯罪を通して、ダビデにフォーカスを合わせるのではなく、ダビデがどれほど悪いことをしたのか、ああだ、こうだではなくて、神様のメッセージを聞かないといけません。人間はヒーローではありません。ですから、最も人間らしく生きることというのは、イエス・キリストを主人として迎えてキリストによって生きることです。言葉を替えますと、キリストだけを誇りにして生きる人、その人生です。ダビデのこの犯罪を通してさかのぼってダビデの人生を振り返ってみると、このように理解できるようになります。ダビデは兄弟の中で末っ子で、いちばん汚い仕事、羊飼いの番を任せらていて、預言者が来た時には呼ばれもしない存在でした。そのダビデにサムエルが他の兄弟、兄たちを除いてダビデに「これからあなたがイスラエルの王になる」と油注がれました。そのときやはり人間的にはいろいろ評価があるでしょう。「ダビデはすごい信仰を持っているね」。間違いないかもしれません。でも、ダビデの今日の犯罪を通して振り返ってみると、それがダビデがああだ、こうだではなくて、キリストの恵みなのだということを覚えてください。ダビデは少年でありながらゴリアテという敵の将軍を石投げ一発で倒して、そのときから人々によってヒーローにされました。「ダビデの信仰はすごいな」。もちろんそうです。でも、振り返ってみると、それはダビデが偉いから、ダビデが良い信仰を持っているからではなくて、キリストによって、キリストの恵みだったということです。ダビデはサウル王に復讐する機会がいくらでもあったのに寛容になりました。神が油注がれた主のしもべに手を加えることなどできませんと。それはダビデのきよい心、寛容的な心と思っていました。もちろんそうです。しかし、キリストの恵みによってだった。そして、今日の犯罪の前に、ダビデはあらゆる国に行く先々において勝利を治めることができました。すごいなと思っていたのでしょうけれども、その勝利がキリストによって、キリストの恵みによってだった。これが人間らしい生き方、考え方です。キリストのゆえに、そのキリストの恵みによって。と言いますのは、人間的な自慢として誇りに思うようなことがあってもなくても構わないということでしょう。ここにいる皆さんも十分ダビデのように、キリストのゆえに、キリストの恵みによってなので、それがメッセージなのです。私たちは忘れてはいけません。いつでもどんな状況でも、うまくいってもいかなくても、それでもキリスト、だからキリスト、結局キリストなのです。聖書を見ますと、神様に用いられた信仰の働き人などがたくさん紹介されています。しかし、聖書はその業績だけではなくて、その人の恥ずかしい部分を包み隠さずに詳細に紹介されています。偉いことばかりではありません。モーセもそうだったし、アブラハムもペテロもパウロもみながそうです。なぜそうなのでしょうか。人はヒーローではありません。キリスト以外に希望はありません。キリストだけが誇りです。それがあなたがたにとって幸せであり勝利なのです。人間が頑張って結果がどうなる、そういう狭い世界ではありません。目に見えない霊的な世界によって動かされているものがこの地球、宇宙です。キリストだけを誇りに思うことが暗やみの力が砕かれる道であり、そこにこそ神の国が臨まれ、勝利の実を結ぶようになるということを忘れないようにしてください。

　そのためそれを徹底的に刻み込まれていたパウロは手紙を書くたびに、これを強調して勧めて告白しています。Ⅰコリント1：28-31、「また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになられました。まさしく、「誇る者は主にあって誇れ。」と書かれているとおりになるためです」。自分が偉いから義ではなくて、キリストが義であり、キリストが聖めなのです。だから、私にそのような要素が一切見られなくても、私はキリストを自分自身に誇りに思い、私は義であると宣言することができるわけです。自分の中でキリストを誇りに思わないと、自分が主人になっていると高慢になるか、あるいは落胆するしかありません。また、Ⅰコリント2：1-2にも「さて兄弟たち。私があなたがたのところへ行ったとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです」とあります。これがパウロの信仰、また人間らしい姿勢です。エペソ2：8-9にも「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです」。ピリピ3：7-8、「しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また」と告白しています。今まで誇りに思っていた、今も世の中ではそれが自慢の、誇りの材料になるもの、それをすべてちりあくただよ、キリストだけが誇りなのだよと告白しています。だから、すべて失うのかと言いますと正反対です。神様が罪を犯す前に「生めよ。増えよ。地を満たせ」とおっしゃいました。まず神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それらは加えて与えられる。それがキリストだけを誇るときに、正しい意味をもって私たちに入ってくるようになります。Ⅱコリント12：9-10「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです」。私に誇れるものがないと認めたときに、キリストだけが誇りになるので強いものになるということです。ピリピ1：20、「それは私の切なる祈りと願いにかなっています。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです」。Ⅰコリント15：8-10、「そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現われてくださいました。私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです」。このパウロは世界を動かす者として用いられました。自分自身に誇れるものは何もないと認めて告白し、そこに下りてきたときに、キリストだけが誇りになったときに、人間的な表現で申し上げますと、怖いものなしなのです。皆さんに肉体的に、人間的に自慢できる誇れるようなものがもしあるとすれば、それがキリストを誇りに思うことに邪魔にならないように気をつけていただきたいと思います。そして、逆に他の人と比べて人間的な誇りに思うようなものがない場合は、だから不平不満、比較などに走りますが、そうしないようにしましょう。皆さんに人間的な誇りがない場合は、それはキリストだけを誇りなさいというサインなので、それこそ神の恵みなのです。パウロが私の弱さを誇りに思うと告白したように、何も不満に思っていたり、気が縮まっていたり、劣等感を持っていたりする理由がありません。また、それを克服して他の人のように誇れるものをたくさん手に入れるために頑張る理由もありません。キリストだけを誇りにする最高のチャンス、その環境が整っているのではないでしょうか。そのときに誇れるものがあるかないか関係なく、キリストだけを誇りにして暗やみの力が砕かれて、神の国が臨まれるようになります。先ほども申し上げましたように、皆さんの内側でずっと皆さんに言い聞かせてください。キリストを誇り続けるように。「私はこれでだめなのだ。こういう風に無視されたから。こう思われているから。これがないから」そういう皆さんに向かってキリストを誇りに思うように。だから私はキリストが必要なのです。だから、キリストが誇りなのです。私に義はありませんが、キリストの義の胸当てを誇りに思い、堂々と神様にお祈りができ、神の祝福が自分のものだと言えるものなのです。それがキリストを自分の中で誇り続けることなのです。誇りであるものは人に自慢したくなりますよね。ですから、人々に自分のどうのこうのと関係なく、自分の中で誇りであるキリスト、自慢であるキリストを誇ってください。そのときに人を生かす最高の祝福の門が開かれます。自分自身に聖なる自信が持てるようになるでしょう。人間的な自慢、誇りの有無によって、自信が持てたり、そうでなかったりというような人生は人間らしい人生ではありません。自分が主人なのです。もう終わりにしましょう。古いものは過ぎ去り、すべてが新しくなりました。歯を食いしばってでも、皆さんの脳細胞の中に目をつぶってみことばを中心にして言い聞かせてください。キリストを誇り続けてください。

　それから、人に対しては期待せずに、そして、失望もしないようにしましょう。人は愛する対象であり、仕える対象です。期待したり、逆に期待が叶わいので失望したりということは、これから気をつけるようにしていきましょう。最後に一言言いましょう。心からレムナント教会の兄弟姉妹の皆さんは決心しましょう。ときにまた騙されるときもあるでしょうけれども、すぐに立ち上がるように。でも、決心しましょう。これから残りの生涯、私は人間として生きるのだと。私は人間として生きる。創造主を見上げつつ、キリストを誇りに思い、キリストに従って人間として生きると。

（祈り）

恵み深い天の父なる神様。ありがとうございます。混乱している時代、この世の中を神様は私たちを生かし、そして、送ってくださり、世の光として、この世を生かす者として、教会として立たせてくださったことを感謝いたします。同過去の祝福をサタンは勘違いによって邪魔しようとしています。騙されずにみことばに従って人間としてキリストを主人に迎え、キリストだけを誇りにして、人間の誇りの有無などに一切左右されることなく、堂々と勝利の人生を歩むことができるように、ひとりひとりを祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。